

女子大國文 第百五十四号 平成二十六年一月三十一日

肥前島原松平文庫蔵『間狂言』（二冊）について

——京都大学大学院文学研究科図書館蔵『大蔵流惣間語』との関係を中心に——

川 島 朋 子

はじめに

間狂言は、能の中で狂言が演じる部分であり、その台詞を集めたものが間狂言台本として残されている。間狂言台本はその存在は多く知られるものの、紹介されている資料はきわめて少なく、その全容は明らかにされていない。

そこで本稿では、肥前島原松平文庫に所蔵される間狂言台本を紹介したい。同文庫には一冊本と四冊本の二種があり、後に詳細を記すが、本稿では特に一冊本に焦点を当て、その特色、とりわけ京都大学大学院文学研究科図書館蔵『大蔵流惣間語』との関係に着目したい。大蔵流の主な間狂言台本については、能楽資料集成『貞享年間大蔵流間狂言二種（続）』の田口和夫氏の解題⁽¹⁾において詳しく論じられている。それらの台本の中で、この台本がどのように位置付けられるのかを考察していきたい。

間狂言（以下、「アイ」と略称）には、曲によつて様々な役割が与えられている。山本東次郎氏の『間狂言の研究』⁽²⁾の分類に従えば、大きく会釈間（アシライアイ）と語間（語りアイ）とに分けられる。アシライアイは、シテやワキとの交渉を持つアイで、曲の全般に渡り登場し、重要な役割を果たすものもある。最も多いのは、語りアイの中でも、複式能の前場と後場の間、間之段において、多くはワキの要請に従い、座つて物語を語るもの、居語りである。立つたまましやべるものを立ちシャベリと呼ぶ。また、劇的な演技を見せる劇アイなどもある。間狂言の役割により、詞章の長短にも大きな差がある。世阿弥自筆本にも「ヲカシ」としてアイの台詞が記されている曲もあるが、現在の語りのような長大なものではなく、ごく短いシャベリの詞章である。室町末期以降に語りが長大化し居語りが成立していくことが、表章氏により指摘されている。⁽³⁾

世阿弥自筆本をはじめ、室町時代の写本も多く残る能とは異なり、狂言には古い台本が存在しない。もともと即興的、流動的であつたためであり、江戸初期に台本が書き留められるようになるのである。間狂言もまた同様であり、大蔵流では江戸初期に太蔵虎明が記した『間之本』（以下、虎明本）が最も古い。

一 肥前島原松平文庫蔵の間狂言台本

まず本稿で扱う肥前島原松平文庫については、中村幸彦氏・今井源衛氏・島津忠夫氏「肥前島原松平文庫」、同「肥前島原松平文庫（二）」⁽⁴⁾において、詳しく述べられている。その蔵書は島原藩の旧蔵書で、松平氏初代藩主にあたる松平忠房（一六二三—一七〇〇）の集めたものや忠房が父から受け継いだものが中心をなす。その他、後の藩主が集めたものや藩校の本、臣下の本などが含まれるが、今回取り上げる間狂言台本は、忠房以後の時代に加わつたものである。まず、二種類の間狂言台本について書誌を述べる。

『間狂言』一冊（二九九—一〇）

横本。四つ目袋綴。縦十三・四 cm×横十九・九 cm。紙数・六十六丁。半葉行数・十六行。題簽「間狂言」。所収曲数・五十八番。

奥書「文政七年秋

喜多尾 久右衛門を借写」

『間狂言』四冊（九七—四）

横本。四つ目袋綴。第一冊、第二冊、第四冊は縦一三・四 cm×横二〇・二 cm。第三冊のみ縦一三・四 cm×横一九・四 cm。紙数・第二冊八十二丁、第二冊六十九丁、第三冊五十八丁、第四冊四十六丁。半葉行数・十二行。

外題・内題なし。所収曲数・百六番（第一冊三十三番、第二冊三十七番、第三冊二十一番、第四冊十五番）

以下、本稿においては便宜上、一冊本を松平文庫本甲本、四冊本を松平文庫本乙本と称して区別することとする。

どちらも複数の筆によると思われる。甲本は全体的に文字が乱雑な印象があり、誤字も多い。例えば、アイに多く見られる台詞で、ワキなどに対する「畏て候」という返答があるが、「畏」の字を明らかに「農」と書いている人物がいる。このような大変初歩的な誤りも多く、内容を理解しないで書写しているとも考えられる。甲本は前掲「肥前島原 松平文庫（二）」の「補記」で、「前稿執筆後、更に島原公民館から、松平文庫に属する書物が、幾天か発見された」とされるうちの一点である。「その多くは特に虫損がひどく、繙読にたえがたい」とされるように、この甲本も、虫損

により読めない箇所が少なくない。

乙本は曲ごとに改訂し、複数の書写者が交替している。第三冊のみ曲ごとの改訂はないが、他の冊と同様、丁の変わり目で書写者が交替しているようで、曲の途中で筆跡が変わることもある。第三冊は寸法のみならず、書写形式にも他の冊との違いが見られるが、複数の人物で分担して書写している点は共通している。四冊のうち第三冊のみ、別に写されたものなのかもしれないが、この乙本については稿を改めて考察することとしたい。

甲本の所収曲数が五十八番、曲籍は三・四・五番目物にとどまるのに対し、乙本は百六番（重複あり）と曲数が多く、曲籍も全てを網羅する。間狂言台本として、現存の形では乙本の方がより完備しているのだが、甲本と乙本とで重複する曲の中で、乙本が甲本により詞章を訂正している曲が見られることが注目される。乙本の目録に朱で印が付けられている曲があるが、その中で第一冊の〈富士太鼓〉〈住吉詣〉〈舍利〉（二部のみ）、第三冊の〈楊貴妃〉〈善知鳥〉の本文には、朱筆により、甲本の詞章への訂正が加えられている。ただし重複曲は二十九曲にも及ぶのであるから、その数は決して多いとは言えない。しかしながら、島原藩において甲本の本文が尊重されることがあったことは注目されよう。

二 『大蔵流惣間語』との関係

それでは松平文庫本甲本と、先にも述べた京都大学文学部図書館蔵『大蔵流惣間語』（以下、惣間語）との関係について見ていきたい。惣間語については拙稿⁽⁵⁾でも述べたが、横本一冊、四百四十四丁、重複を含む二百四十九曲を所収する間狂言台本である。

大蔵流の間狂言台本としては、先述したように大蔵虎明による虎明本が最も古く、弟子家の本として筑波大学図書

館蔵西村本『問之本』⁽⁶⁾能楽研究所蔵『貞享松井本』『貞享鞍貫本』⁽⁷⁾がある。田口和夫氏『貞享年間大蔵流問狂言本二種』解説において、「西村本・松井本・鞍貫本等の弟子家の本より、虎明改訂の本に近いところがあり、そのような本がすくなくだけに貴重と思われる」とする。なお『貞享鞍貫本』は稀曲を中心に集められた台本である。

また長田あかね氏は、龍谷大学大宮図書館蔵『大蔵流問之本』(以下、問之本)と惣間語との関係について明らかにしている。⁽⁸⁾拙稿でも述べたが、簡単に両書の関係を確認しておく。惣間語には各曲に番号が付されているので、以下その番号と曲名とを合わせて示すこととする。まず惣間語の前半部分は「一 高砂」から「二十三 養老薬水」が龍大本第一巻、「三十 東北」から「五十八 葛城」が龍大本第四巻、「八十四 籠祇王」から「百十七 咸陽宮」が第八巻、「百十八 小塩」から「百四十二 豊干」が第六巻と一致する。両書の対応については表1に示した。途中、「二十四 紅葉狩」から「二十九 第六天」、「五十九 春日龍神」から「八十三 昭君」は該当せず、今のところその本文系統は不明である。そして後半部分については龍大本と一致せず、他の台本に拠っているとされてきた。

今回、惣間語の後半の最初に当たる「百四十三 楊貴妃」から「百八十五 禅師曾我」までが、先に紹介した松平文庫本甲本と曲順が一致し、同じ系統の本文を持つことが判明した。曲順については次章で論ずることとし、本章では両者の本文について検討していきたい。

①両者の本文の近さ

惣間語では前半にある曲は省かれているため、松平文庫本甲本の五十六曲中三十九曲が、惣間語と重なる本文を持つ。まず、「小原御幸」を例に、その本文を挙げることにする。「小原御幸」(大原御幸)とも)では、前場でワキ(万里小路中納言)の従者として出、後白河法皇の大原への御幸を触れる役割を務める。次に、松平文庫本甲本(13)、惣間

語（百五十五）、松井本、西村本の順に示す。（松平文庫本甲本、惣間語の引用に際しては、私に句読点を付す。以下同じ。また、松平文庫本甲本で欠損により解読できない部分は「」で示す。）

松平文庫本甲本

小原御幸 「」

ワキ鳥羽院臣下同道シテ出太鼓座居ル。名乗過て呼出ス。

御前に候。小原へ御幸被成候間、道作其清め仕れト申候へ。^{（畏）}農て候。

皆々承候へ。小原へ御幸被成へきとの御事にて候そ。皆々罷出て道を作り其清めを仕れとの御事候そ。其分心得候へく

惣間語

小原御幸 ワキ鳥羽院臣下同道シテ出太コサ居ル。名乗過てヨヒイダス。

御前に候。小原へ御幸被成候間道作其清メ仕レト申候へ。畏て候。みなく承候へ。小原へ御幸被成へきとの御事にて候そ。

皆々罷出て道を作り、其清めを仕れとの御事候そ。其分心得候へく

貞享松井本

小原御幸 出立右同前（筆者注・狂言袴）

御前に候 シカく 畏て候。皆々うけたまわり候へ。小原へ御出被成候間、罷出道をも作り。其きよめを仕

り候へとの御事也。各其分心得候へくシカく

西村本

小原御幸 三拾

御前に候。畏て候。皆々承候へ、小原へ御幸被成候間、皆々罷出道をも作り、そのきよめを仕り候へとの御事也、そのふん意得候へく。

このように、その内容は台本によりほとんど変わらないが、台詞や漢字と仮名の違いなど表記の方法は台本により異なることが分かる。その中で松平文庫本甲本と惣間語の異同は文字遣いの違いにとどまっている。また両書の本文の近さは、その形式にもある。その特徴は、曲名を記した後に、アイが出るまでの過程が簡略に述べられることにあり、ここでは「ワキ鳥羽院臣下…」以下がこれに当たる。なお、惣間語で龍大本と同文を持つ部分には、松井本同様、最初に装束についての記載がある。

②両書の異同

この〈小原御幸〉の例のように、松平文庫本甲本と惣間語の詞章にはほとんど異同がないのであるが、実は全く同文と言える曲は三十九曲中十四曲にとどまる。その多くは台詞の一部の表現の違いにすぎないであるが、大きく異なる詞章を持つ曲もある。

大きな違いを持つ曲は、詞章の省略が見られるもの、詞章に異同が見られるものとに分けられる。まず一つ目の詞

章の省略は「2 松風」「3 善知鳥」「35 唐船」「48 三井寺」「50 安宅」に見られる。「2 松風」「3 善知鳥」については、ワキとの問答のみを記し、続く語りの台詞はない。「35 唐船」は前半部の箱崎の下人のアシライアイのみが記され、間之段の唐船の船頭の子方との応対の台詞は記されない。「50 安宅」も始めに出る富樫の従者である太刀持の台詞はあるが、後に出る弁慶の強力の台詞は書かれていない。また「48 三井寺」もアイが二人で、それぞれ前場で清水寺門前の者、後場で三井寺の能力が出る。やはり清水寺門前の者の部分だけを記しているが、「48 三井寺」のみ目録に「後間ハ別本ニ有」と記していることが注目される。能力のアイは別に記しているということであろうか。「別本」が対となる冊を指すのか、全く別の台本を指すのかは、不明である。「三井寺」において、能力の役はきわめて重要であり、これを欠くということは不自然である。これは「唐船」と「安宅」についても同様である。目録では「三井寺」にのみこの注記があるので、他の曲についても同様であるのかは不明であるが、このようにアイの一部のみを分割して記載する台本は、今のところ他に類を見ない。なお、惣間語と別の本文を持つ曲についても、「烏帽子折」「輪藏」の二曲は後半を省略していると考えられる。

また文字遣い以外の詞章の異同が見られる曲は、表2の「本文異同」の欄に示した通りであるが、特に異同が多く見られるのは「船弁慶」「山姥」「黒塚」（惣間語では「安達原」などである。「山姥」は、山姥の曲舞で有名になり百万山姥と呼ばれる遊女（ツレ）が男達（ワキ・ワキヅレ）を連れて善光寺に参る。その案内をする堺川の里人がアイの役である。その道中、日中にも関わらず突然暗くなり、宿を探していると、一人の女性（前シテ）が現れ、山姥の曲舞の一節が聞きたいと言って姿を消す。その中入り後のワキとアイの問答の一部を示す。傍線を付した部分が異同箇所である。

ワキシカ／＼如常。是ハ思も寄らぬ事御尋候物哉ト常之通り云テ、

先山姥にハ、団栗か成と申候。いわれ社候え。先山の峯に団栗の木か有て、夫か谷へころり／＼ところび落、其内にちり芥か取付、胴体か出来、手足か出来、則団栗か目と成て、是か山姥に成と申候。否左様の仰られそ。惣じて人間の目の大き成を団栗目と申も、是より初りたると申候が、何れ団栗の分にてハ成間敷候。又申にハ、山姥にハ、野老か成と申候。惣じて明ケ暮雨か降候えは、山かくづるゝ事の候。其時彼野老が顫れて、夫か雨露にうたれ、次第に胴体か出来、目鼻口耳手足か付、野老にハ髭と申物の候が、髭か白鬚と成て、是か山姥に成と申候。慥に成と申が、其様に被仰せるれハ、是非も無候。誠ニ思ひ出して候。山姥にハ、山中の惣構に建たる木戸が成と申候。其子細ハ、先一旦門を建事ハ立たれ共、重て修履をも致さねハ、戸ひらかぶきもくさり落、柱斗か残て、其程に葛葛かまとひ付、次第に大き成て、手足か付、おそろしく性根が入、山姥に成と被仰そ。否々左様にな被仰そ。山姥を山に住木戸と申候。木戸、鬼女。誠に我等の申ハ筋無事にて、都の御方に参逢、本説を承満足仕候。扱あれに御座候御方の御名をハ何と申候。我等のこさかしき申事にて候へ共、最前の女の詞の末ニ、山婆の一ふし御諷ならハ、誠の姿顕しうつり舞をまおふと御承候間、彼一ふしを御諷候へて、山姥のまことの姿を御らんあれかしと存候。畏て候。

惣間語

如常。先山姥には、団栗か成と申候。いわれ社候へ。先山の峯に団栗の木か有に、夫か谷へころり／＼と転ひ落、其内に塵芥か取付、胴体か出来、手足耳鼻出来、則団栗か目と成て、これか山姥に成と申候。実々団栗の分にて

ハ成間敷候。又申にハ、山姥には、野老か成と申候。惣て明暮雨が降入ハ、山か崩るゝ事の候。其時彼野老か顕れて、夫か雨露にうたれ、次第に胴体耳鼻手足付、野老には髭と申物の候。此髭か白髪と成て、これか山姥に成と申候。其様に被仰るれハ、是非もなく候。誠に思ひ出して候。山中の惣構に建たる木戸が成と申。其子細は、先一旦門を建事ハ立たれ共、重て修履をも致さねハ、戸開かふきもくさり落、柱斗が残て、其程に蔦葛かまとひ付、次第に耳鼻手足か付、恐ろしく性根が入、山姥に成と被申候。否々左様にハ被仰そ。山姥ハ山に住木戸と申候。木戸、鬼女。誠に我等の申ハ筋無事にて候。都の御方に参逢、本説を承満足仕候。扱あれに御座候御方の名をは何と申候。我等のこさかしき申事にて候へ共、最前の女の詞の末、山婆の一ふし御諷有ならハ、誠の姿顕し舞を舞ふや覽承候。彼一ふしを御諷候て、誠の姿を御覧有かしと存候。畏て候。

惣間語より、松平文庫本甲本の方がやや長くなる。例えば引用箇所冒頭は、惣間語では「如常」とのみあるが、松平文庫本甲本ではその内容が詳しく記される。また、団栗が山姥になったとの説の中で、人間の目の大きいことを団栗と言うようになった、という一節が入るのも惣間語に比べて長くなる要因の一つである。なおこの文言は西村本にも見える。またここには引用していないが、〈山姥〉の前半で善光寺への道案内をする場面で「上道下道あげ越と申ス中にも」(松平文庫本甲本)とあるところが、「下道あげ路越と申ス中にも」(惣間語)とあり、惣間語では「上道」がない。ここは直前に「是より善光寺の道、三筋御座候」とあるから、上道、下道、上路越の三筋であるべきで、惣間語の誤脱と言えよう。このように、松平文庫本甲本によって惣間語の詞章を補うことのできる箇所は、他の曲の中にも少ないながらも存在する。しかしながら大きく内容に関わる異同は見られない。

③虎明本との関係

前掲田口氏の論に述べられた虎明本^⑨との近さは、氏は論中、龍大本と重なる前半部分を例に挙げて論じている。そこで今回明らかとなった、松平文庫本甲本との重なり部分にも同じことが言えるのかどうか、検討したい。しかしながら、松平文庫本甲本五十六曲中、虎明本と重なるのは「45 舍利」一曲のみである。〈舍利〉は、惣間語では百九・百十番に当たり、龍大本と重なる前半部分に属するので、松平文庫本甲本とは異文を持つ。以下に、舍利についてアイが語る部分を示すこととする。虎明本の詞章本文と重なる部分に傍線、虎明本の注と重なる部分には二重傍線を付した。虫損により解読できない部分は「」で示し、惣間語や虎明本により推測できる箇所は補った。松平文庫本甲本には誤りと思われる箇所も多いため、不明な文字は□で示した。

松平文庫本甲本

扱只今の御物語にて思ひ出したる事「の候」。昔も去事の候。語て聞セ申「」るにて候。惣じて当寺の御舎利の
有難き子細と申ハ、釈尊御入滅の刻きんくわん未とぢさるに足疾鬼と云鬼神、双林の元に近付御□を壱つ引かい
「」取事、仏つ弟子達驚き止人し給ふ所に片付の間に四萬由しゆんを飛越、須弥の事四王天へ逃上ルを韋駄天追
詰むはい取、其後かんだの道仙律師にあたへられしより、此方そうぜうして我朝へ渡セしを、嵯峨の天皇の御宇
の初て此寺に安室仕むふ世尊滅跡を今に至るまで仏肉□止つて広く天下に流布する事あまねした「」今の世
に当守社仏社にて御座有と申候。某の存るハ古の疾鬼か執心、仁間に化、仏前に近付、御舍利を取て失たると存候。
扱是ハ何と被仰候。某が分別にハあたはず候間、お僧もあと御思案「」給ハリ候へ。

〔本文〕

偕テ唯今ノ御物語ニテ思ヒ出シタル事ノ候。昔モ去ル事ノ候。惣シテ当寺ノ御舍利ノ有難キ子細ヲ如何ニト尋ヌ
 ルニ、忝クモ釈迦如来御入滅ノ御時、足疾鬼ト申鬼ガ、釈迦如来ノ向フ齒ヲ取テ、虚空ニ失申候。韋駄天ト申
 テ、早キ御仏ノ候テ、其鬼ヲ追詰、取り御歸シ有テ、帝釈ヘ御渡シ被レ成候ヲ、後ニ帝釈従リ、終南山ニ道宣律
 師ト申テ貴キ御方ノ御座候ニ、與ヘ給ヒタル御舍利成ルニ依テ、唐土天皇我朝三国ニ隠レ無キ御事也。扱又韋駄
 天ト申御仏ヲ如何ニト尋レハ、是ハ毘沙門の御弟ニテ御座ス。其韋駄天ノ早キ御事ハ、ツマハヂキラスル間ニモ、
 三千大千世界ヲ、流通ニカケリ給フ御事成ルニ依テ、疾鬼ヲ追詰メ、色々ノ子細有テ、当寺ヘ渡リ、今ニ於テ当
 寺ニ御座有リ、隠レナキ仏舍利ノ事ニテ候。左有ルニ依テ、今ノ世ニハ、当寺コソ、仏在世ニテ御座有ルト申ハ、
 此子細ニテ御座候ガ、扱ハ某ノ推量ニハ、又古ヘノ足疾鬼ガ執心人間ニ化ケ仏前ニ近付キ、御舍利ヲ取テ失セタ
 ルト存シ候。扱是ハ何トシテヨウ御座有ラウズルゾ。我等ハ分別ニ不スレ能ハ候間、御僧モチト御思案有テ給ハ
 リ候ヘカシ

〔註〕

金棺未^ル閉^レ時、捷^{シヨウ}疾鬼ト云鬼神、潜^ニ双林ノ下ニ近付テ、御牙ヲ一ツ引^{カイ}鉗テ取、仏弟子驚キ留メントシタマヒケルニ、
 片時ガ間ニ、四萬由旬ヲ飛越テ須弥ノ半、四天王ヘ逃上^{ニゲ}ル。韋駄天追政奪取リ、其後、漢土道宣律師ニ被^レ與シヨリ以来、
 相承メ、我朝ニ渡セシヲ、嵯峨天皇ノ御宇ニ、始テ此寺ニ安置シ、大聖世尊滅後二千三百余年ノ已後、仏肉指留テ、
 広ク天下ニ流布スル事、普^{アヤキ}シ（中略）又ツマハジキラスル間ニ、三千大千世界ヲカケリ給フ程ハヤキ仏ケナリト云、
 是ニ参学アリ（後略）

松平文庫本甲本は虎明本の本文と註から抜粋し、ほぼそのままの文を取り入れていることが分かる。よって、田口氏の指摘する虎明本との近さは、龍大本と重なる前半部分のみならず、松平文庫本甲本との重なる部分についてもあてはまると言える。なお惣間語は「毘沙門の御弟子韋駄天と申て 御座候が、其韋駄天の早き事ハ一彈指の間にも三千大千世界を流通にかけり給ふ程早き御仏成れハ」「大唐終南山二道宣律師とて貴き人の御座有しに」「誠二唐土天竺我朝三国にかくれなき仏舍利なり」など、虎明本の表現を受け継ぎながら、独自の表現を用いた詞章である。

三 松平文庫本甲本と惣間語の曲の配列

では次に、所収曲と曲の配列に着目したい。松平文庫本と惣間語の所収曲の対応について、表に示した。概ね一致が見られるのだが、それぞれに曲の出入りが見られる。ここから考えられることは、以下の二点である。

まず一点目は、惣間語では、前半で龍大本系統の台本に含まれた曲については、これを写さなかったものと考えられるということである。拙稿において、前半部と後半部で別の台本によった合わせ本であるにも関わらず、相互に曲が重複していないことから、後半部を書写する際に、既に前半部で写した曲は省いたのではないかと推測したが、そのように考えて問題ないであろう。つまり、松平文庫本の曲順は、惣間語が拠った台本の本来の曲順を示すものと言える。

ただし、二点目としては、曲が全く差し替えられていると思われる部分があるということである。「10 俊成忠度」「11 行家」「百五十二 水無瀬」「百五十三 護王」の箇所である。特に「11 行家」は、目録で「六代」を消して加えられていることに注目される。松平文庫本甲本にあり、惣間語にないのは「15 経政」である。また逆に惣間語にあり松平文庫本甲本にないのは、「百六十九 関原与一」「百七十 室君」で、「31 吉野静」の後に位置付けられる。

ではどちらがより本来の形、つまり両書の共通祖本に近い配列なのであろうか。この部分は、曲籍は三番目物、四番目物、五番目物、四・五番目物が並ぶ。例外は惣間語にない「俊成忠度」「行家」「経政」である。「俊成忠度」「行家」の部分に入る「百五十二 水無瀬」「百五十三 護王」は四番目物に当たり、松平文庫本にない「百六十九 関原与一」「百七十 室君」も四番目物に当たるから、惣間語の曲順の方が、より本来の形に近い可能性が高いと言えよう。ただし松平文庫本甲本「鳥追舟」「俊寛」は目録にのみあり本文がないので、これは書写の際に意図的に省いている可能性がある。配列から考えると、本来は少なくとも脇能、二番目物を収めた冊が存在したと推測される。「俊成忠度」「行家」「経政」はそちらの冊に含まれていた可能性があるが、どの段階でこの松平文庫本甲本のような曲順に差し替えられたのかは不明である。

ではなぜ松平文庫本甲本の系統では、これらの曲の差し替えや削除が行われたのか。ここで差し替えられている曲は多く稀曲とされる曲であり、通常の上演曲には含まれない。ただし、稀曲の上演が盛んに行われた五代将軍・徳川綱吉（在位・延宝八年（一六八〇））、六代将軍・家宣の時代（在位・宝永六年（一七〇九）—正徳三年（一七二三））には、その間狂言も当然必要となったため、間狂言台本には稀曲のアイの詞章も収められている。各流派が演目を報告した書上における状況と、綱吉・家宣時代の上演状況を見ていきたい。表章氏「能の変貌—演目の変遷を通して」⁽¹⁰⁾を参考とした。それぞれ書上における状況、綱吉・家宣時代の上演回数⁽¹⁰⁾の順に示す。なお《経政》は江戸初期にも上演記録があるため、綱吉・家宣時代の上演記録回数は省いた。

・松平文庫本のみ

《俊成忠度》は享保九年書上で宝生流のみ見える。三十一回。

《経政》は寛文・享保書上に金剛流以外ある。

〈行家〉は書上に見えない。十回。

・惣間語のみ

〈関原与一〉は享保書上で宝生流のみ。十五回。

〈室君〉は噺子方では寛文・享保書上にあり、シテ方では享保書上で金春流。十回。

〈護法〉(惣間語では〈護王〉と表記) 寛文・享保書上で宝生流のみ。十二回。

・松平文庫本甲本で目録のみ

〈鳥追舟〉 噺子方で寛文書上にあつて享保書上になく、天明以後五流で再興。十六回。

〈俊寛〉は享保書上で観世・宝生新収。十七回。

・松平文庫本で目録削除

〈六代〉 書上、上演記録共に見えない。

しかし時代により上演状況は変わる。惣間語は稀曲を省く傾向があると、前掲長田氏稿で指摘されているが、〈鳥追舟〉〈俊寛〉の二曲は惣間語にのみある。どちらも上演曲に加えられていることから、上演の機会があつたのかもしれない。〈六代〉は書上にもなく、上演記録も見えないことから、削除されたのであろう。他には特定の傾向は見えないが、書写される際の事情が働いている可能性もある。次に、松平文庫本の書写状況について考えてみたい。

四 松平文庫本書写の背景

松平文庫本にはその書写年代が明らかであることが挙げられよう。その奥書について考えてみたい。書写された文政七年(一八二四)は藩主・松平忠侯の治世に当たる。また奥書に名が見える「喜多尾久右衛門」という人物であるが、

松平文庫に所蔵される『明細帳』に次のようにあることから、島原藩の藩士であったことがわかる。

喜多尾久右衛門

文化十四年巳二月五日並右筆詰文政二卯正月十一日御足米貳石、同年閏四月廿日御足米四石、同五年六月廿九日扶持拾五人大納戸詰、同八酉二月四日病死。

文政八年に病死しているから、この間狂言台本は亡くなる前年に書写されていることになる。喜多尾が狂言に関してどのような役割を担ったかは分からないが、他の藩士達が喜多尾から借りた台本を手分けして写したものであろうか。

島原藩の狂言については、貞享四年刊の『能之訓蒙図彙』^①に、

松平主殿殿 新町道中立売下ル 弥太郎弟子 鞍貫勘四郎

とある。松平主殿殿は松平忠房のことであり、鞍貫本の鞍貫勘四郎は忠房に抱えられていたことが分かる。また忠房の藩主時代に豊州から狂言師が来ている記録もあるが、この台本が写された時代も含め、その後の時代については不明であり、特定の狂言役者を抱えた記録は見つからない。

次に、書写された当時の藩主・松平忠侯について見ていきたい。松平文庫に所蔵される『乱伝書等』(天保三年写)と題された伝書は囃子や習を書き集めたものであるが、その奥書には、忠侯の名が見える。(道成寺)の項に「大友勘之丞手留借写」とあるが、藩日記より、忠侯はこの大友勘之丞、もう一人、大原正五郎という金剛座の謡役者から稽古を受けていることが分かる。この時代に藩における演能の様子は藩日記にも記されないものであるが、藩主自身が能に対して熱心であったことは確かであると考えられる。同様に能に熱心であり、宝生太夫から伝授を受けている初代・忠房の時代には、藩日記にも演能の記録が多く見られ、ここでは藩士達も能を舞っている。記録こそ残らないが、忠侯の時代も同様であったと考えられよう。複数の筆跡が認められること、文字が乱雑であり誤字も多いことから、短

時間に写さなければならぬ事情があつたのではないか。

惣間語は、稀曲を省く傾向があり、また本文の訂正が見られることから、上演に即して実演に用いるための台本であつたのではないかと、拙稿において推測した。松平文庫本甲本もまた、台本として使用するために書写された実用を目的とした台本であろう。そのために必要のない曲は写されなかつたと考えられる。ただし、書写したのは島原藩士達と考えられ、狂言役者による台本のような完備された形式ではなく、後半を省略するなど、おそらく必要に応じた変則的な書写形式になつたのではないか。

落合博志氏により紹介された国文学研究資料館蔵『大蔵流能間』⁽¹²⁾は、宇佐宮の賀徳氏が大蔵又左衛門の宿所で、又左衛門の正本を写したとの奥書を持つものである。このような形で素人による書写が行われていることが分かるのは意義深い。松平文庫本甲本もまた、元は狂言役者の所有していた台本が伝えられて、喜多尾久右衛門が所持していたものを写したか、喜多尾を通じて書写が実現したものと考えられるだろう。

おわりに

松平文庫本甲本は間狂言台本としての不完全さがあることは否めない。語りなど詞章の省略がなされ、誤写も多い。目録で「三井寺」の注記にあるように、本来一冊ではなく対になる別の冊が存在した可能性も考えられる。そこに省略された部分が記されていたのかは不明である。これは能の中でアイを演じるための台本としては、あまりに不備が多い。稽古のために必要とされたのではないかと推測できるが、このような台本は他に例がないので、今後さらに検討していきたい。

松平文庫本甲本と惣間語の一部は、共通祖本を持つことは間違いないと言える。両書を比較することで、書写を経

て伝えられていくうちに、アイの詞章が変容していく様子を知ることができることは、アイの流動の過程を考える上でも貴重である。特に松平文庫本甲本の意義としては、惣間語の成立に関わった台本の形を再現できること、本文の価値はあまり高いとは言えないが、少なからず惣間語の誤りを補える点にあるであろう。

また虎明本、西村本、松井本など、狂言役者により記された台本とは異なり、素人によって伝えられた台本である。このような台本がどのように伝播し、稽古に用いられているのかを考える上でも、重要である。今後、他の江戸中期書写の大蔵流間狂言台本とも比較して更に考察していきたい。

注

- (1) 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成16 (一九八八年・わんや書店)。
- (2) 一九四一年・わんや書店。
- (3) 『謡曲・狂言』(一九七七年・角川書店)。
- (4) 『文学』29・30 (一九六二年十一月・一九六二年一月)。
- (5) 拙稿「京都大学文学部蔵『大蔵流惣間語』の性格―「那須」の本文訂正を中心として」『国語国文』七〇―七二(二〇〇一年十二月)。
- (6) 飯塚恵理人氏「筑波大学附属図書館蔵 西村本『間之本』(A冊)」「『榎山国文学』18 (一九九四年三月)」、同(B冊 その一)『榎山国文学』19 (一九九五年七月)、「同(B冊 その二)」20 (一九九六年三月)、「同(B冊 その三)」21 (一九九七年三月)。文中、西村本の本文は翻刻の引用による。
- (7) 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成15・16 田口和夫氏校訂(一九八六年・一九八八年、わんや書店)。文中、松井本の本文はこの二冊の翻刻を引用した。

- (8) 長田あかね氏「龍谷大学大宮図書館蔵『大蔵流間之本』をめぐる諸問題―京都大学文学部図書館蔵『大蔵流惣間語』との関係など―」『藝能史研究』152 (二〇〇一年一月)。
- (9) 『古本能狂言集』一〇五 (一九四三、四四年・岩波書店)。
- (10) 『中世文学』35 (一九九〇年六月)。
- (11) 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成10 表章校訂 (一九八〇年・わんや書店)。
- (12) 落合博志氏「翻刻 国文学研究資料館蔵貞享二年写『大蔵流能間』『調査研究報告』」32 (二〇一二年三月)。

貴重な資料の閲覧、掲載をお許しいただいた、肥前島原松平文庫、京都大学大学院文学研究科図書館に記して御礼申し上げます。

本稿は野上記念法政大学能楽研究所における若手研究会で行った口頭発表「肥前島原松平文庫蔵間狂言台本について」(二〇一三年五月十六日)を元になっている。落合博志氏、宮本圭造氏をはじめ、席上貴重なご意見をいただいた諸氏に御礼申し上げます。

松平文庫本甲本、惣間語の翻刻に当たっては、平成二十四年度後期開講科目「国文学特殊講義3B」の受講者である、上保芙記子、新庄美佐子、長坂晴子、宮崎那津子、丸井しずかの協力を得た。

(本学准教授)

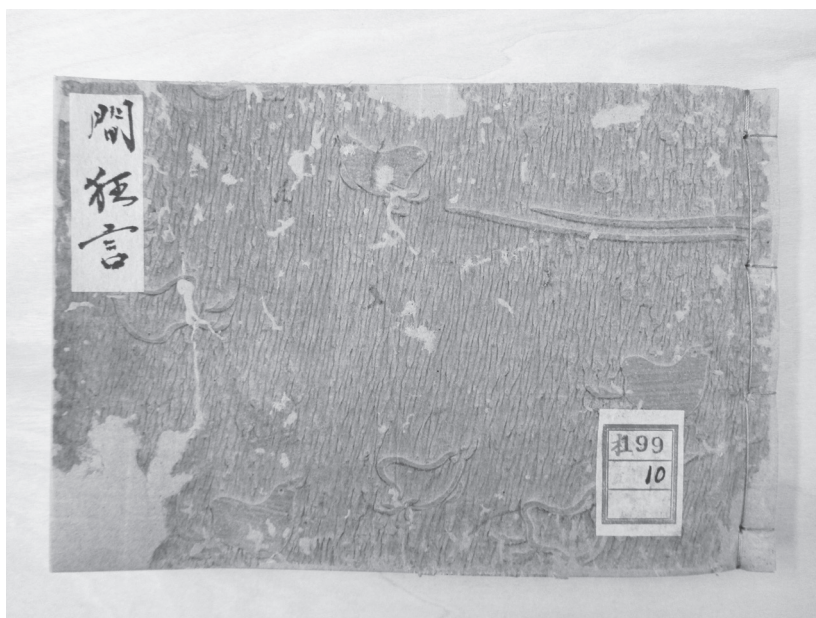
表 1 『大蔵流惣問語』前半部、『大蔵流問之本』対応表

惣問語				龍大本
一	高砂	～二十三	養老薬水	第一巻
二十四	紅葉狩	～二十九	第六天	該当なし
三十	東北	～五十八	葛城	第四巻
五十九	春日龍神	～八十三	昭君	該当なし
八十四	籠祇王	～百十七	咸陽宮	第八巻
百十八	小塩	～百四十二	豊干	第六巻

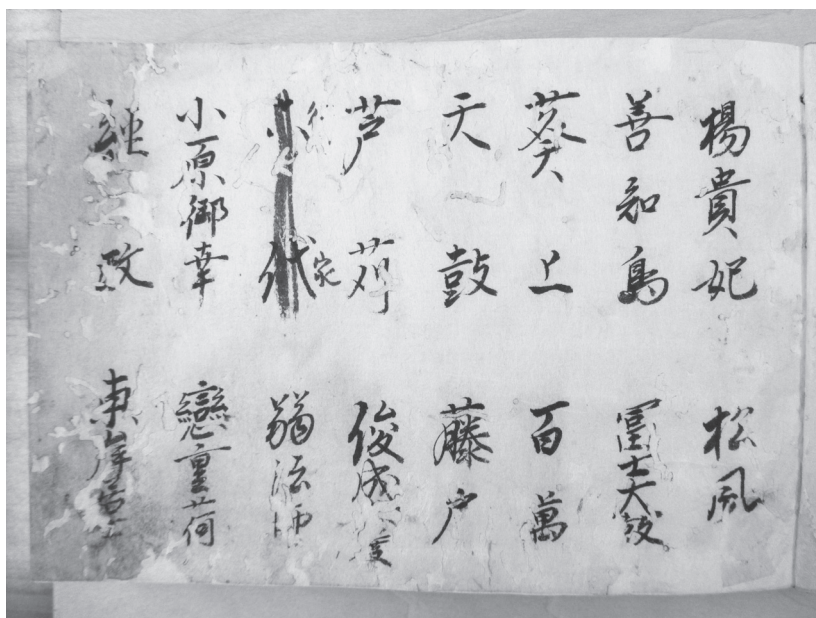
表 2 松平文庫本甲本 所収曲一覧

		曲籍	惣問語の番号（曲名）	惣問語のみ所収曲	本文異同	乙本
1	楊貴妃	三	百四十三		有	○
2	松風	三	百四十四		有（省略）	
3	善知鳥	四	百四十五		有（省略）	○
4	富士太鼓	四	百四十六		無	○
5	葵上	四	百四十七		無	○
6	百万	四	百四十八		無	○
7	天鼓	四	百四十九		有（省略）	
8	藤戸	四	百五十		有	○
9	芦刈	四	百五十一		無	
10	俊成忠度	二	なし	百五十二 水無瀬	一	
11	行家	二	なし	百五十三 護王	一	
12	弱法師	四	百五十四		無	
13	小原御幸	三	百五十五		無	○
14	恋重荷	四	百五十六		無	
15	経政	二	なし		一	
16	東岸居士	四	百五十七		無	○
17	自然居士	四	百五十七		有	○
18	花月	四	百五十八		無	
19	放下僧	四	百五十九		有	
20	春栄	四	百六十		有	○
21	盛久	四	九十八		一	
22	巻絹	四	百六十一		無	
23	住吉詣	三	百四		一	○
24	二人静	三	百三		一	
	(鳥追舟)	四	百六十二 (鳥追)		一	
25	籠太鼓	四	百六十三		有	

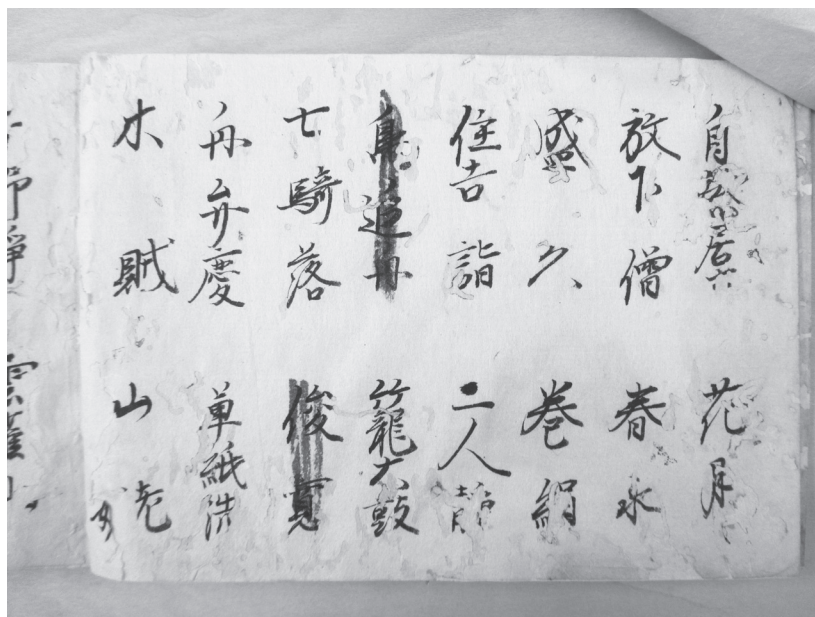
		曲籍	惣間語の番号（曲名）	惣間語のみ所収曲	本文異同	乙本
26	七騎落	四	百六十四		有	○
	（俊寛）	四	九十五		—	
27	船弁慶	五	百六十五		有	○
28	草子洗	三	八十八		—	
29	木賊	四	百六十六		無	○
30	山姥	五	百六十七		有	
31	吉野静	三	百六十八		有	○
				百六十九 関原与一	—	
				百七十 室君	—	
32	雲雀山	四	九十四		—	○
33	金輪	四・五	百七十一		無	
34	蟬丸	四	百七十二		有	
35	唐船	四	百七十三		有（省略）	○
36	摂待	四	九十一		—	
37	烏帽子折	四	九十三		—	○
38	邯鄲	四	百七十四		有	○
39	班女	四	百七十五		有	○
40	小督	四	百七十六		無	○
41	小袖曾我	四	百七十七		有	○
42	竹雪	四	百七十八		有	
43	正尊	四	九十七		—	
44	西行桜	三	百七十九		有	○
45	舍利	五	百九・百十		—	○
46	黒塚	四・五	百八十（安達原）		有	
47	藤栄	四	百八十一		有	○
48	三井寺	四	百八十二		有（省略）	○
49	殺生石	五	百三十八		—	
50	安宅	四	百八十三		無	○
51	鞍馬天狗	五	八十二		—	
52	元服曾我	四	百八十四		有	
53	禪師曾我	四	百八十五		有	○
54	調伏曾我	四・五	百一		—	○
55	大江山	五	百		—	
56	輪蔵	四	二十七		—	



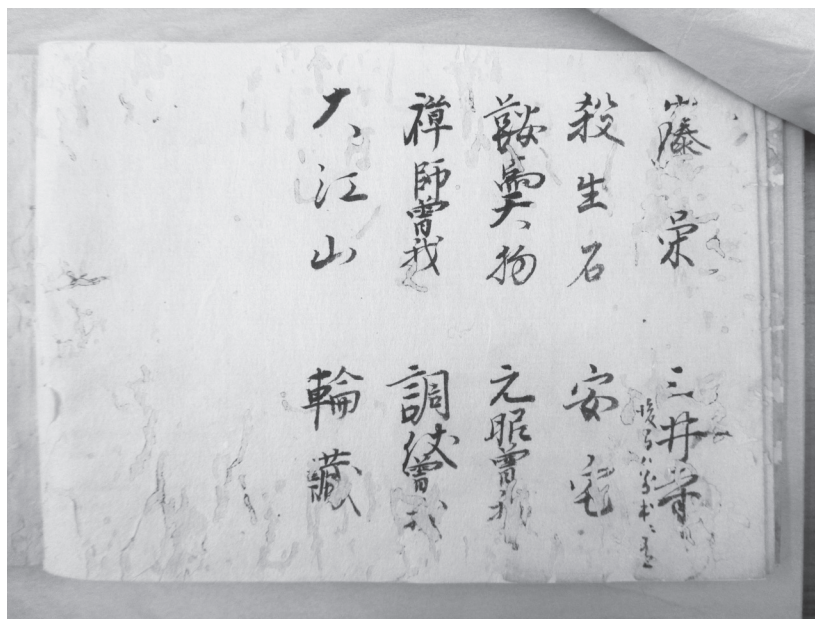
表紙



1丁表



1 丁裏



2 丁裏

此物切ん少きニテ紙の口を
 手紙を敷いて二枚を合せて
 手紙を切ん

不の者と、四方ハケル所ハナリ
にて如哉　今ハけちすに
我の一方をそなくいふ家ニ至
妃より、一方の九柱ハ、明と云
漢てうきし神方立しといふ
いふ者、我の一方にてハケル
あんがまはれぬに言ふ
とうは、其の中じを真方と云
の、その言のいふやうに、
は、其の事いふ、
うきするもの、心持

文政七年秋

其多處為小字

24